



Title	「西大寺所蔵金銅透彫舍利容器の再検討」
Author(s)	森, 香乃
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2024, 10, p. 25-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98142
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「西大寺所蔵金銅透彫舍利容器の再検討」

日本・東洋美術史 博士前期課程二年
森 香乃

はじめに

仏教の開祖、釈迦の遺骨である「舍利」は、仏教を信仰する各地域において古来より篤く崇拜されてきた。奈良・西大寺が所蔵する金銅透彫舍利容器（以下、「本品」と略称）は、燈籠形をした透彫の華麗な容器で、細部に至るまで技巧を凝らした日本の舍利莊嚴美術を代表する作品のひとつである。現在は西大寺が所蔵するが、木製基壇内部の修理墨書銘から、元々は西大寺末寺となつた奈良・大安寺に伝来したことが分かっている。

先行研究においては、制作年代や図像解釈、舍利の由緒等、様々な考察が行われ、概ね鎌倉時代に西大寺を中興した叡尊（一二〇一～一二九〇）を中心とした西大寺の舍利信仰の影響が濃厚であるとの見解が示してきた。本発表では、制作年代、図像解釈について再検討するともに、新たに本品を使用した儀礼について考察することを目的とする。

第一章 制作年代

本品の制作年代については、これまでの研究において、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての制作と位置づけられている。近年では、酒井元樹氏が詳細な検討を加え、本品には十四世紀の刀装具・調度品の金具に近い表現が認められるとする見解を示している¹。また、本品屋蓋の原型とみられる京都国立博物館所蔵の金銅龍唐草文舍利容器屋蓋に注目し、この屋蓋をともなう旧舍利容器が至徳二年（一二八五）に大安寺でおきた火災により焼失したために本品が復元模造として制作されたとした。しかし、末兼俊彦氏は蛍光X線分析の結果から、酒井氏の説に疑問を呈し、本品の制作の背景・時期には一層の検討が必要であると指摘している。このような近年の研究動向から、本品の制作年代についてはなお検討の余地が残されていると考へる²。

本発表では、まず鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての金工作品を中心に図像モチーフや彫金技法の比較を行い、本品が十四世紀以降に制作された可能性を改めて確認する。続いて発表者は、頂部の火焰宝珠が、十四世紀の作とされている京都・禅林寺所蔵の金銅密觀宝珠形舍利容器の火焰宝珠に近似することに注目する。ただし、この二作品には彫金技法に若干の年代差が見受けられ、禅林寺舍利容器には南北朝時代以降に多くみられる特徴も確

¹ 酒井元樹「西大寺所蔵金銅透彫舍利容器について」（『美術史』六〇（一），一〇一一年）

² 末兼俊彦「金銅透彫舍利容器」解説（文化庁・京都国立博物館編『京の国宝 守り伝えられる日本のかたち』一〇二二年）

認できることから、本品は鎌倉時代末期頃の制作と位置付けるのが妥当と考える。

第二章 図像解釈

本品に表された図像については、従来より西大寺流³の舍利信仰からの影響が濃厚であるとの見解が示されてきた⁴。酒井氏は、西大寺流の舍利解釈の影響についてより具体的に言及している⁵。西大寺流の舍利信仰については、叡尊の舍利信仰に起因すると考えられてきた⁶。叡尊は西大寺入寺前、醍醐寺で修行していた。醍醐寺周辺の寺院で形成された小野流では、舍利が様々な密教のほとけと同一視されていたが、舍利の解釈をめぐって醍醐三流と小野三流の二派に分かれていた。醍醐三流では、舍利が釈迦の遺骨としてではなく、宝珠と同体と見做す説が唱えられ、種々の宝珠法によつて祀られた。もう一方の小野三流においても舍利を釈迦の遺骨と解釈することはなかつたが、一字金輪の種子に姿を変えたものと見做されていた。西大寺流の舍利信仰は、この二つの舍利解釈を取り入れたものとされており、酒井氏は本品の造形についても、この二つの舍利解釈を折衷した特徴がみられるとする。

まず、醍醐三流の舍利解釈の影響として、屋蓋の双龍の三鉢を呑み込もうとする姿、また瓶を傾け、水を流すという特徴的な姿に注目し、この二頭の龍を不動明王と愛染明王と解釈した。不動と愛染の組み合わせについては、舍利厨子等の作品に、如意輪觀音の三昧耶形である密觀寶珠を中心として、その脇侍に不動・愛染の二明王を置くものがしばしばみられ、これらは如意輪觀音を本尊とする宝珠法において使用された可能性が指摘されることから、この舍利解釈が造形に影響しているとした。次に、小野三流の舍利解釈の影響としては、塔銃形合子の蓋と相輪の間に智拳印を結ぶ仏を置く点に注目し、この智拳印を結ぶ仏を一字金輪と解して、一字金輪を本尊とした道場觀が本品の造形に関わっているとした。

酒井氏が指摘する、如意輪・不動・愛染の三尊形式からなる舍利解釈については、この三尊形式を説く『東長大事』に表されるモチーフの組み合わせが本品にもみられることから、発表者も賛同するところである。

加えて発表者は、本品に施された龍の表現に注目する。まず、屋蓋部の双龍のうち水瓶を傾け水を流す龍の姿は、祈雨の儀礼の本尊として使用されていたという奈良国立博物館所蔵の「最勝曼荼羅」（文安元年（一四四四））に描かれた八大龍王の中に同様の表現の龍が確認できる。また、仏教美術以外の作品に目を向けてみても、豪雨が降り注ぐ場面において、龍神が水瓶を傾けて水を流すような表現をとることが知られる。次に、本品塔身の龍文は、

³ 「西大寺流」という名称について、西大寺は現在、叡尊を宗祖とする真言律宗の總本山だが、その成立は、叡尊在世中よりも後の時代である。そのため、ここでは叡尊在世中における信仰について、便宜上「西大寺流」と呼称する。

⁴ 河田貞「金銅透彫舍利容器」解説（奈良国立博物館編『仏舍利の莊嚴』、同朋舎出版、一九八三年）

⁵ 関根俊一「南都における中世舍利莊嚴具の展開（一）」（『佛教藝術』二〇四、一九九二年）

⁶ 註1前掲。

⁶ 内藤栄『舍利莊嚴美術の研究』（青史出版、二〇一〇年）

龍が宝珠の入った鉢を両手で掲げる姿が、奈良国立博物館所蔵の春日龍珠箱（十四世紀）の外箱蓋裏に描かれた龍と酷似するほか、龍王や龍王の従者の姿としても散見される。このような姿の龍や龍人は、一概に祈雨に関する図像とはいえないものの、祈雨に関連する作品のなかに比較的多く表される。

なぜ本品の図像のなかに、祈雨に関連する図像が使用されているのか。ステイーブン・トレーンソン氏は、如意輪・不動・愛染の三尊形式の舍利解釈の源流が、請雨經法の龍神信仰に求められるとする⁷。請雨經法とは、真言密教の阿闍梨が神泉苑で行っていた祈雨に関する儀礼であるが、トレーンソン氏は、請雨經法が〈不動・舍利／宝珠・愛染〉という龍神信仰に立脚するものであったことを指摘し、十二世紀末までに請雨經法の正伝を受け継いだ醍醐寺では、請雨經法が途絶した後も、その法の信仰は醍醐寺で清瀧神信仰を通じて相承され、醍醐寺で修行した叡尊等の僧は、相伝したこの龍神信仰を秘匿するのではなく、かえって新規儀礼を通じて一般に広めたとする。

このように本品の図像に、『東長大事』で表されるモチーフの組み合わせがみられること、また祈雨などと関連する図像が用いられていることを考えれば、請雨經法を源流にもつ如意輪・不動・愛染の三尊形式と近い思想が本品の図像の中に反映されていると考えることができる。

第三章 使用目的

次に、本品の使用目的について、文献史料から考察を進めたい。本品を使用した儀礼を考える上で注目したいのが、文安五年（一四四八）に著された『大安寺年中行事次第法式』（以降、「次第法式」と略称）という中世大安寺の年中行事に関する史料の正月行事の記述である。『次第法式』正月八日条に「七晝夜不斷如意輪陀羅尼」という儀礼が記されるが、この儀礼については詳細な記述がないため、具体的な内容は不明なもの、「七晝夜不斷如意輪陀羅尼」という名称から察するに、正月八日からの七日間如意輪陀羅尼を不斷に唱えるといった儀礼内容があつたことが推測される。

このような正月八日から七日間の如意輪に関する儀礼として、中世西大寺において叡尊により始められた宝珠法である「如意宝輪華法」があり、この儀礼において如意輪・不動・愛染の三尊形式に関連する舍利容器が使用されたという指摘がある⁸。

この「如意宝輪華法」について、叡尊の伝記である『西大勅謚興正菩薩行実年譜』では、叡尊は正元元年（一二五九）に「如意輪不動愛染三顆宝輪華秘法」一巻を著し、翌文応元年（一二六〇）より、正月八日からの七日間、西大寺において「隨心如意宝珠根本陀羅尼」を昼夜途切れることなく唱える「如意宝輪華法」という儀礼を寺全体で行い、以降年中行事とした

⁷ スティーブン・トレーンソン『祈雨・宝珠・龍 中世真言密教の深層』（京都大学学術出版会、二〇一六年）

⁸ 註6前掲。

と記される⁹。

この『次第法式』正月八日条に記された儀礼と西大寺で叡尊在世時より行われていた「如意宝輪華法」が、日付の一致のみで、同一儀礼であったとするのは早計にすぎるかもしない。しかし、『次第法式』では、他の行事においても叡尊在世時より西大寺で行われていた行事が同一の日付において行われており、西大寺との深い関係がうかがえ、西大寺より始まる行事が中世大安寺の行事に大きく影響していることが想像される。

以上の点より、『次第法式』正月八日条に記される「七晝夜不斷如意輪陀羅尼」は、叡尊在世中の西大寺にて行われていた「如意宝輪華法」と同様またはそれに近い儀礼であり、この儀礼において、如意輪・不動・愛染の三尊形式の舍利解釈による影響が考えられる本品が使用されたことを指摘したい。

最後に、この儀礼が大安寺において行われた理由として、発表者は儀礼による利益が関係していると考える。「如意宝輪華法」の利益については、『西大勅謚興正菩薩行実年譜』や『興正菩薩御教誠聽聞集』等の文献より、国家安全や寺門肅清、利益衆生が祈願されたことが分かっている¹⁰。細川涼一氏は、『次第法式』からみる中世大安寺の年始の行事について、大般若經や最勝王經の転読による祈祷といった鎮護國家を祈祷する寺院としての一面をうかがわせると述べており¹¹、この細川氏の指摘を踏まえるならば、大安寺で年始に行われていた「七晝夜不斷如意輪陀羅尼」も、同様に鎮護國家を祈祷するといった利益が望まれたものであったと考えられるだろう。

おわりに

本発表では、西大寺所蔵の金銅透彫舍利容器について再検討をおこなった。本品の具体的な制作時期や背景、制作に関与した人物等については、中世大安寺に関する文献資料が乏しいため、現在のところ全く不明といわざるを得ない。しかし今後は、同じく大安寺の本寺であつた興福寺に関連する史料等を調べることにより、本品の制作事情についてより考察を深めていきたいと考えている。

⁹ この儀礼については、叡尊の自伝である『金剛仏子叡尊感身学正記』弘安七、八年条にもわずかながらに正月の七晝夜不斷陀羅尼に関する記述がある。

¹⁰ 『西大勅謚興正菩薩行実年譜』文応元年条、『興正菩薩御教誠聽聞集』「持齋祈雨事」

条

¹¹ 細川涼一「中世大安寺の年中行事」（同著『中世寺院の風景』、新曜社、一九九七年）